

時代を生きた先覚者たち

自然豊かな阿南の地で、武骨に、しなやかに、一途に、それぞれの時代を生き抜いた先覚者たちの軌跡を追う。

【其の二】橋本宗吉

はしもと そうきち

寄稿 阿南市文化財保護審議会会長 湯浅 良幸さん

橋本曇齋先生



橋本宗吉肖像画（武田科学振興財団 杏雨書屋所蔵）

大坂蘭学の創始者として、また日本電気学の祖と言われた

宗吉（宝暦13（一七六三）年〜天保7（一八三六）年）は、大坂蘭学の創始者として、また日本電気学の祖と言われた。
しかし、那賀郡荒田野村（現阿南市新野町）に生まれながら一部の人を除いて徳島県では、ほとんど知られていなかった。
子どもの時に故郷を追われるように去ったこと、後にキリシタンの疑いをかけられて交際のあつた人たちもあえて宗吉のことを隠したためと思われる。安芸国（現広島県）竹原（現竹原市）に住む子孫も務中氏を名乗りあえて橋本姓を隠した。
しかし、日本の蘭学者の中では一流の学者として認められている。

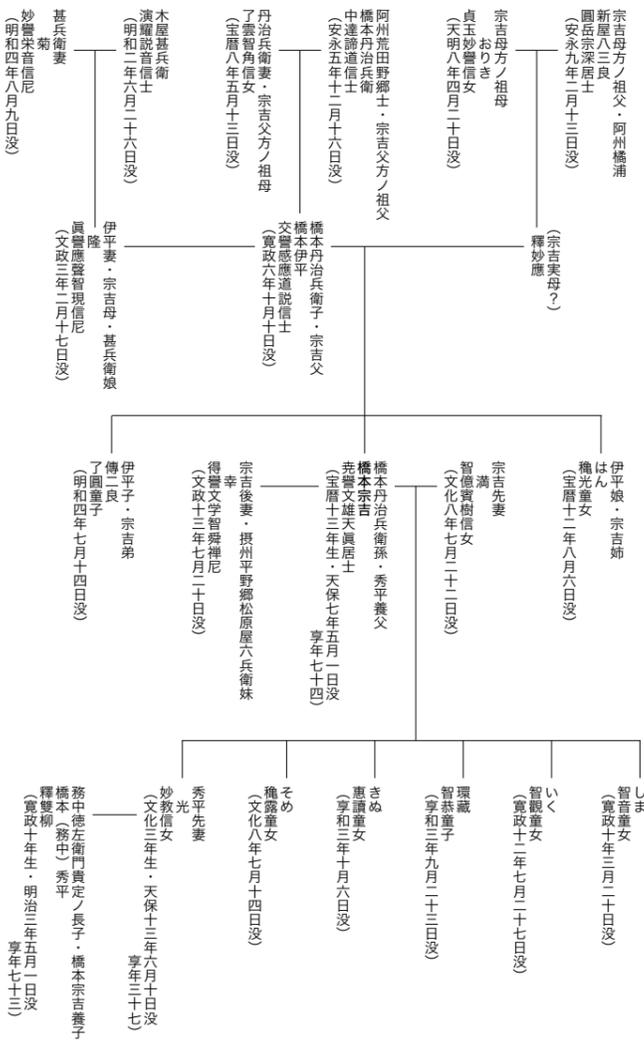
蘭学は江戸時代、オランダ語を通して西洋の学術・文化・技術・知識などをわが国へ伝えられた。はじめはオランダ語の通訳が医学を学んでいたため医療が主であった。やがて薬学・天文学・暦学等を学ぶ人がふえた。幕末には英語・フランス語・ドイツ語を学ぶ人がふえ蘭学は洋学と言われるようになった。
幕府はキリスト教を禁止し、宣教師や信者を弾圧した。やがて国外へ追放し始め、寛永10（一六三三）年、ポルトガル人を国外へ追放し始めた。幕府の許可した船しか

外国へ渡ることを禁止した。そして貿易は平戸と長崎に限られた。
寛永13（一六三六）年には、ポルトガル人を隔離するため長崎に人工島出島を築いた。寛永16（一六三九）年にはポルトガル人を国外に追放、寛永18（一六四一）年平戸のオランダ商館を出島へ移した。しかし、オランダ人の自由な外出を許さなかった。外国との交流を鎖す（鎖国令）ことが幕府の方針となり、明治維新まで続いた。外国の情報や物資は出島だけしか入ってこなかった。西洋医学を学ぶ人たちは競って長

崎へ赴いた。
宗吉は宝暦13（一七六三）年、那賀郡荒田野村（現阿南市新野町）に生まれた。名は鄭、字は伯敏、通称は宗吉と言った。号を曇齋と名乗ったのは寛政11（一七九九）年36歳の時だった。
祖父橋本丹治兵衛は郷士であった。そのため苗字を名乗れた。父は伊平（寛政6（一七九四）年10月10日に亡くなった）。実母は新屋三良の娘（詳細は不明）であり、伊平の後妻は文政3（一八二〇）年2月17日に亡くなっている。
宗吉には姉はんと弟伝二良がいたが、2人は幼少時に亡くなっている。
父伊平は苦しい生活をしてきた。わずかの田畑を売り払い幼少の宗吉を連れて浪花（大坂）へ移り住んだ。

夜逃げ同然の伊平は北堀江の木屋甚兵衛を頼り甚兵衛の裏長屋に住み、傘作りを始めた。明和3（一七六六）年、伊平は甚兵衛娘隆と再婚した。4、5歳にしかならなかった宗吉は父の傘作りを手伝い傘の紋を描いた。紋の出来栄がよかったので評判になったそうだ。
宗吉は天明6（一七八六）年、23歳の時満と結婚（文化8（一八一）年7月22日亡くなった）、文化10（一八一三）年播磨国（現兵庫県）平野郷松原屋六兵衛妹幸（文政13（一八三〇）年7月20日亡くなる）と再婚した。

【橋本家系譜】（原田裕司さん作成）





『エレキテル究理原』に描かれた、中 喜久太による
フランクリンの実験図 (大阪市立科学館提供)

文政10(一八二七)年、門弟藤田顕蔵(阿波出身)が大坂町奉行所に逮捕された。これがキリシタン事件の発端となり同年6月宗吉も奉行所に呼び出され、厳しい取り調べを受けた。

この年、シーボルトが帰国した。乗っていた船が暴風雨にあつて難破した。この時、幕府天文方高橋景保からもらった『日本沿海輿地全図』が発見された。文政9(一八二六)年、シーボルトが浪花へ来た時、会った蘭方医2、3人も逮捕された。

宗吉は取り調べを受けたが、疑いは晴れた。当時、幕府のキリシタン追及は厳しく、いったん疑いをかけられると完全に疑いが晴れるまで監視された。

文政11(一八二八)年7月以降、宗吉がキリシタン容疑で逮捕されてから蘭方医たちは絲漢堂に姿を見せなかった。

文政10(一八二七)年9月、養子の秀平・光夫夫婦は安芸の竹原(現広島県竹原市)へ転居し医業を開いた。やがて宗吉も竹原へ移った。

秀平は竹原の務中家の人で、宗吉は秀平の才を見込んで養子とした。しかし、秀平は橋本姓を名乗らず務中で通した。

さて、浪花でキリシタン事件で逮捕された者たちは文政12(一八二九)年12月死刑に処せられた。宗吉はこの事件は終わったと思ひ浪花へ帰ってきた。



絲漢堂跡 (大阪市中央区南船場3丁目)

宗吉は天明7(一七八七)年、24歳の時、蘭学者(医師)小石元俊に入門した。宗吉の勉強ぶりは近隣に知られるようになり、その才能を買われ、豪商間 重富(天文学を勉強していた)らの援助を受けて江戸へ遊学した。寛政6(一七九四)年有名な蘭学者大槻玄沢に入門した。玄沢は杉田玄白の弟子で、前野良沢からオランダ語を学んでいる。

宗吉はわずか2カ月で単語4万語を覚え、4カ月で『蘭学階梯』『蘭語草稿』を習得したと言われる。同年浪花へ帰ってから天文学・地理・医学の翻訳にとりかかった。

寛政6(一七九四)年には、父伊平が亡くなった。

寛政9(一七九七)年5月、浪花で初めての蘭学塾絲漢堂を開き、内科と外科を看板に掲げた。

寛政10(一七九八)年には、師小石元俊

の指導のもと人体解剖に立ち会い、各臓器のオランダ名を記録している。

この年、絲漢堂には80人の門弟が集まっている。阿波からも麻植郡山崎村(現吉野川市)藤田顕蔵、美馬郡舞中島村(現美馬市)三宅速水、阿波郡市場村(現阿波市)玉井民らが入門している。

寛政11(一七九九)年には、曇斎と名乗った。当時、宗吉は蘭学者としてはそうそうたる存在で、「蘭学者相撲番付」で西小結に挙げられている。勸進元は大槻玄沢。この番付には横綱・大関はなく関脇に稲坂三泊・山村才助がのせられている。

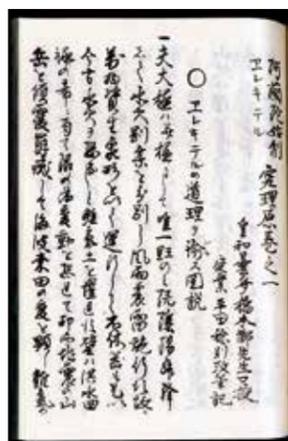
寛政12(一八〇〇)年には、女体の解剖を指導し、その成果によって宗吉の名は全国に知られるようになった。

この年、『西洋産育手術全集』を執筆している。

文化元(一八〇四)年41歳の時、製菓処方・治療を網羅した『蘭科、内外科三法文典』2冊を出版した。

同8(一八一二)年には妻満を亡くした。またこの年、『阿蘭陀始制エレキテル究理原』を完成、『エレキテル訳説』を書いている。

宗吉はエレキテル(電気)の実験を行い『エレキテル究理原』を著した。この本はわが国初めての実験電気学の著書である。この業績により「日本電気学の祖」と言われた。



『阿蘭陀始制エレキテル究理原』(複製)
個人蔵 (大阪市立科学館提供)

宗吉は、人に頼んで実験をしてもらった。やり方は次のようである。

大きな松の木の上に松脂を詰めた桶を結び付け、それに棒を差し込み、棒の先に針金を長く下げ、下に松脂を詰めた箱の台を置いた。やがて雷がゴロゴロ鳴るので一人がぶら下がっている針金の一端を持ち台の上に立ち、もう一人は大地に立って互いに指を出し合っておった。すると指先から火花(スパーク)が出て確かに雷はエレキテルに違いない実験が出来た。

宗吉は蘭書によって手さぐりで実験をし、蘭書が正しいことを証明した。

文化10(一八一三)年、『蘭科内外三方典』6冊を出版。

この年、松原屋六兵衛妹幸と再婚した。文政4(一八二二)年、5カ年間にわたり『医書宝函』6巻までを出版した。

ところが、大槻如電が明治10(一八七七)年に発行した『日本洋学年表』では宗吉は文政12(一八二九)年刑死したと書かれている。このことは如電が林 洞海から聞いたとのいわくつきである。

明治10(一八七七)年になつてもこのような本が出ているから、事件当時宗吉とつながりのあつた人たちは宗吉のことを語らず門人たちも宗吉についての記録を焼いたようである。このようなことで、宗吉の業績が隠されたことはうなずける。子孫として同様だった。

宗吉の墓は大坂上本町念仏寺・竹原市照蓮寺にある。

昭和10(一九三五)年5月11日、宮内省は宗吉に正五位を追贈している。

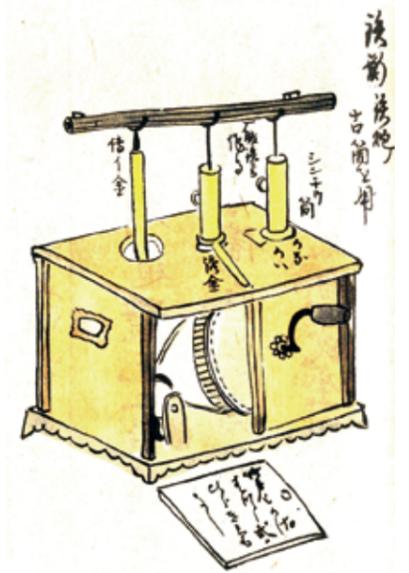


宮内省から宗吉に送られた位記 (市立竹原書院図書館所蔵)

参考文献
古川良夫作成「橋本曇斎(宗吉)の年表と背景」
『大阪史説会報』第4号

橋本宗吉とエレキテル

橋本宗吉は、日本で初めて静電気を科学的に研究した人物とされています。宗吉が静電気と出会ったのは48歳の頃。オランダ書の中にあった静電気の記事に興味を抱いて日本語に翻訳したことがはじまりでした。宗吉が使った「エレキテル」とは、静電気を発生させる装置のことです。構造は糸車に似ていて、まず円筒形のガラスを回転するように設置し、そこに金属を接触させます。そして、はずみ車とガラス筒の軸をベルトでつなぎます。使い方は、ハンドルを回して金属とガラスを摩擦させて、静電気をおこします。発生した静電気は、ガラスに接触した「伝い金」を通して、実験に使います。宗吉が1811年に著した「阿蘭陀始制エレキテル究理原」は、静電気とはどのようなものかという解説をはじめ、静電気の性質を知ることができる18種の実験の方法が紹介された「日本初の静電気実験マニュアル」です。実験は、雨雲から電気を取って放電させる実験や大勢で静電気を体感する実験（百人おどし）など多彩な科学実験です。



エレキテルと百人おどしの図（大阪市立科学館提供）



橋本宗吉の功績を後生に伝えたい そして第二第三の宗吉の誕生を願う

現在、宗吉の出生地・新野町で橋本宗吉顕彰会を設立しようとする活動があります。その活動の中心となっている古川良夫さん（85歳・新野町）にお話を伺いました。

——宗吉と出会ったきっかけは
平成14年に市史編さん室長をしていた時、蘭学者の中に宗吉が記載されていた。昔、阿南市に偉い人がいるなと思いました。それから広島県竹原市に出向くなど宗吉を調べるにつけ、その功績やそこから偲ばれる人柄に感銘を受けました。
——宗吉の存在の今日的な意義とは何でしょう

日本の近代科学の手法（科学的な見地や実験主義）を確立させた先達です。その範囲も電気学や医学、薬学、地理学など広範囲に及んでいます。特に近代医学への橋渡しをしたことは歴史上も特筆すべきことです。

——宗吉はどのような人柄だったのでしょうか
まずは一途に学問に励んだ不言実行の人だったと思います。また、不幸な境遇の中でも、世のため人のために尽くした人でした。

——顕彰会を設立したいと思った動機は
過去の歴史、偉人の足跡を学ぶことは現在をいかに生きていくかの指針になります。しかし、郷土の偉人・宗吉はその功績に比べて世の中であまり知られていません。宗吉を末永く後生に伝えていきたいと思いました。
——今後どのような活動をめざしていきますか

皆さまの賛同をいただいて顕彰会を設立し、多くの人に宗吉を知ってもらいたい。特に、子どもたちに郷土の偉人の功績や人柄を知ってほしい。そして第二第三の宗吉の誕生を願います。



顕彰会設立に向けて話し合う（5月11日・新野公民館）

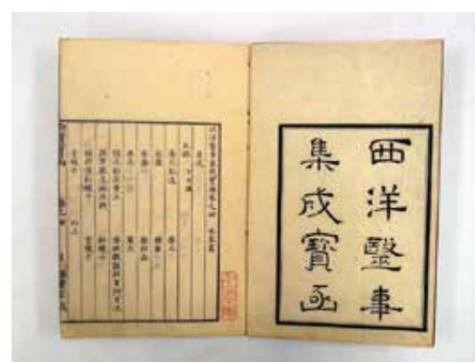
橋本宗吉の著書

万能の人・宗吉は、静電気以外にも、オランダ語の知識を活用して医学、薬学、地理学など多彩な著作を残しています。大阪歴史博物館が所蔵する資料を中心に紹介します。



『三法方典』文化2（1805）年刊（大阪歴史博物館所蔵）

オランダのファン・リスが著した薬学書を翻訳したもの。日本において、近代的な薬学を体系的に紹介した最初期の書物として評価されています。



『西洋医事集成宝函』文政2（1819）年～文政6（1823）年刊（大阪歴史博物館所蔵）
ドイツの医学者ヨハネス・ヤコブ・ウオイトが著した、医学・薬学の辞典を翻訳したもの。宗吉は全35巻の翻訳原稿を完成させました。



『嗚蘭新訳地球全図』寛政9（1797）年刊 個人蔵（大阪市立科学館提供）

18世紀前半のヨーロッパで出版された地図帳を翻訳、編集した世界地図。日本で発行された近代的な内容の地図としては、最初期のものと評価されている。地図の周囲には、世界の地理情報などが書かれています。



三雲環善『施薬院解剖男体臓図』寛政10（1798）年刊 写本（大阪歴史博物館所蔵）
京都の医師三雲環善らが行った人体の医学解剖のようすをまとめたもの。宗吉は臓器の図にオランダ語名称を書き加えています。

参考文献 大阪市立科学館発行『静電気博士になろう 1にならわの静電気博士・橋本宗吉にチャレンジ』、2014年